

明治期における一女性による技芸修業の遺品から —山口ツルコレクションの図案・型紙等の内容—

横川 公子

附属総合ミュージアム 特任教授

≪目次≫

はじめに

1. 研究開始当初からの背景
2. 山口ツル遺品の図案・型紙の内容
 - (1) 半襟の模様図案と型紙
 - (2) ハンカチ模様図案
 - (3) その他の刺繍模様や各種図案の絵刷り
 - (4) 造花部品
3. 図案から見た文様の概要
4. 東京シンガーミシン裁縫女学院におけるミシン刺繍

はじめに

山口ツルコレクションには、洋裁関連資料の他、故山口ツルが遺品として残した手芸品の雛形、それらを作製するための段階標本や型紙・図案、道具類など、教育標本的な資料群が含まれる。山口ツル(1875～1938)は、明治期を果敢に生きた実在の人物である。山口ツルについては、その遺品に含まれた紙背文書の「履歴書下書き」によって、ほぼ半生にわたる学歴や履歴が判明する。また他の紙背文書から、後に「ミシン裁縫女塾」を開設したと思われることも判明している。「履歴書下書き」は、この女塾の開設のために必要とされたものと思われる、当然のことながら、その開設そのものに関する記述はない。また途中まで記述された履歴には、履歴書作成当時30歳ころと推定されるツルの職歴に関する内容は見あたらない。東京シンガー洋裁女学院(以下、同学院と称する)の最初期に同学院の寮に住みながら、同学院の全課程を履修し、その際、作製した教育標本と思わ

れるものがほぼ遺された。それらを総体として山口ツルコレクション(以下、コレクションと称する)とする。コレクションは、同学院の教育内容のみならず、それらを通して判明する当時の技芸修得に関する状況を示唆すると思われる。主たるミシン裁縫関係資料のみならず、同時に取り込まれた多彩な技芸の習得成果としての資料も含まれており、それらの技芸修得の基底にある考え方や諸々の状況が推察でき、注目に値する。

なおコレクションは、その調査が筆者に託されてすでに久しく、整理のついたものからミュージアム資料として受贈されているが、本稿で取り上げた<図案・型紙等>については、現状ではまだ寄贈を完了していない。但し、将来的には寄贈を目指している。

本稿では、図案資料のうち最も数量が多かった、「半襟図案」と明記されている図案や半襟型紙を中心に取り上げた。半衿図案から読み取れる図案自体の特徴や、近代になって取り込まれるようになった「図案」制作等の文脈との関係性についてもできるだけ触れた。

なお、図案ではないが、花びらや葉を象った造花用の部品が少なくない量で遺されており、同学院で修得した小物制作技術の一環として、調査結果に加えている。

1. 研究開始当初からの背景

委託当初に調査した資料はすでに寄贈されているが、それらの調査結果については、以下のように報告している。同学院での主要な目的であったミシン裁縫による洋裁技術の習得が目

指された洋服類の雛形60点や洋服の型紙について、ほぼ全体像の把握をしたⁱ。また上述の履歴書下書きからは、同学院における洋裁技術の習得以外にも取り扱われた教育課程の内容、さらにツルが同学院や同学院寮に逗留しながら、別の機関で学んで取り組んだ「袋物」の内容等についても報告しているⁱⁱ。また袋物の型紙については、5段階に分類された教科課程と教科課程表の一覧に明記された名称を分析することにより、女性の懐中物に西洋風名称を十分の一も数えることができ、明治後期の女性の生活スタイルに西洋風が取り入れられていたことと同時に、それらを持ち運ぶ外出行動のあったことを示唆したⁱⁱⁱ。

本稿ではひきつづき、コレクションから上述の裁縫雛形や袋物以外の資料類を取り上げる。その主なものは、ミシン刺繍による半襟やハンカチ、造花であり、同学院の教科課程で受講し修得することができたものである。こうした手芸品・工芸品の制作上、必須として作られ遺された型紙や図案、造花部品などについて、内容や様態に関する調査の結果を、主に図案の取材（モチーフ）や構図の特徴など造形的な特徴を紹介し、それらの資料としての措定の足掛かりとした。各資料には文様の名称を付しているが、これは、日本服飾史を専門とする筆者の知見によるものであり、主に近世以降に刊行された「雛形本」^{iv}や文芸作品^vに登場する用語や挿絵の分析、文様史関係の渉猟による知見に基づいている。

なお、ここでコレクションの来歴や製作時の状況について、簡単にまとめておきたい。コレクションを中核とする山口ツルの関連資料は、当時（1905年前後）、ツルが夫の赴任先で家族とともに住んでいた京城から、子供たちを召使に託して上京し、シンガー裁縫女学院で修業中に修得したと思われるものであり、洋服の裁縫雛形と型紙類、ミシン縫製による被り物類（女子用帽子類の実物と雛形）、ミシン刺繍（上記の半襟やハンカチ用の）図案や型紙、造花の部品、袋物等の製作品と段階標本や雛型・型紙、

図案、制作品の部品、工具類等を含んでいる。ツル自身がそうした手工芸や洋服裁縫の私塾を開く意図があったらしく、先述のように申請のために作成した履歴書の下書きや女塾の修了証書が手渡されないまま残されているものが、紙背文書として発見されている。

なお関連資料には、ツルの同学院逗留時における、上記のような修行の成果とは思われないものも含まれる。女学校（女子共立職業学校中退^{vi}）時代に教材として制作したと思われるものや、日常の暮らしの営みの中で手作りしたと思われるものも含まれる。たとえば紙縫りを糸状に撚り合わせて作った撚糸の紐を残している。これは、手織りの座布団の側（座布団用布）などを作るためであろうか。また、いろいろな種類の花結びが台紙に並べて綴付けてあって、標本として参照できるようにしてあるもの、等々である。

山口ツルコレクションは、実物大の袋物標本^{vii}や紙縫りの撚糸を除いて、実際に使うために作製されたものではない。暮らしの中で使用する日用品や雑貨を、手作りで作製するための技術や製作方法を指示するための標本資料である。明治期の女性—山口ツルが、暮らしに役立てることや技芸の技能を伝授することを目的として、技芸修行に打ち込み、その間に作成した標本類や教育的標本がまとめて見られるという貴重な資料である。それらは、ツルが現代の専門学校に当たるシンガー裁縫女学院に所属している時に作られたものが大半を占めており、普通教育の学校と必ずしも密着しているものではない。しかし、武庫川女子大学附属総合ミュージアム所蔵の学校教育標本と共通するところがあり、学校教育における具体的な教育内容や、それに託された意図や歴史的背景などが体現されている側面が見られる。その意味からも貴重な資料群である。

2. 山口ツル遺品の図案・型紙の内容

（1）半襟の模様図案と型紙

山口ツル遺品より半襟型紙一覧

I 渋紙に型が彫られた型紙 23枚
 II 型を和紙に写した絵刷り →42種53枚
 III 半襟模様と名付けられた既成品の色刷り図案 →4枚

半襟の図案について、整理した結果を〈文様名〉に集約して、以下提示する。なお各資料の番号は、山口ツルコレクション寄蔵が現段階で完了していないため、現物に即した本稿独自の任意の資料番号としている。

I 渋紙に型が彫られた半襟用型紙→23種

	文様名称	取材	構図	その他
1	竹丸文様	竹	団文	
2	観世水に千鳥	観世水・千鳥		
3	竹文様	竹		
4	百合霞に蝶文様	百合・霞・蝶		
5	枝菊散らし文様	枝菊	散らし	
6	花枝文様	花枝		
7	橘崩しに枝菊文様	橘・枝菊		
8	柳に模様入り花びら文様	柳・花びら		
9	杜若文様	杜若		
10	茶花散らし文様	茶花	散らし	
11	竹と万両文様	竹・万両		
12	枝松散らし文様	枝松	散らし	
13	蛇籠流水桔梗文様	蛇籠・流水・桔梗		
14	観世風流水に秋草文様	観世水・秋草	絡ませスタイル	
15	唐花鳳凰散らし文様	唐花・鳳凰	散らし	
16	遠山川岸に人家文様	遠山・人家・川岸		
17	桧扇に撫子文様	桧扇・撫子	絡ませスタイル アールヌーボー風曲線構図	
18	網干に波千鳥文様	網干・波・千鳥	絡ませスタイル	
19	片輪車に枝葵文様	片輪車・枝葵	絡ませスタイル	
20	片輪車文様	片輪車3つ		
21	秋草文様	尾花・枝菊・桔梗	アールヌーボー風曲線図案	
22	花丸文様	花丸	中央にアクセント、上下に散らし、図案風	
23	斜線に唐花文様	斜線・唐花		

II 型を和紙に写した半襟用絵刷り→42種

	文様名称	取材	構図	分量	その他
1	千鳥散らし文様	千鳥	散らし	1	
2	蝶散らし文様	蝶	散らし	1	カーボン紙写し？
3	葵枝かたばみ文様	葵・枝かたばみ		1	
4	蜘蛛の巣散らし文様	蜘蛛の巣	散らし	1	

	文様名称	取材	構図	分量	その他
5	笈に枝菊と流水文様	笈・枝菊。流水	絡ませ楓団文	2	
6	枝野菊文様	枝野菊		1	
7	枝野菊文様	枝野菊		1	
8	山茶花にバラ時雨文様	山茶花・バラ・時雨	絡ませ楓団文	2	
9	俳句散らし文様	夕暮れにながめ見あかぬ 隅田川	斜め3行書き	1	
10	尾花に撫子散らし文様	尾花・撫子	アールヌーボー 風絡ませ	1	
11	枝乱菊文様	枝乱菊		2	
12	瓢箪文様	瓢箪		2	
13	木瓜の花散らし文様	木瓜の花	散らし	1	
14	文字散らし 巖に竜田川文様	「君が代は」 巖 竜田川		1	
15	文字散らし文様	「こまとめて袖うちはら ふ可希もなし」	左側から3行散 らし	2	
16	文字散らし文様	「奈、へ八重花はさけど もやまぶきの」	3行散らし	1	
17	柳に桜散らし文様	柳 桜	散らし	1	
18	枝花文様	枝花		2	
19	流水に楓芦手繪風文様	流水 楓「からくれない に」	葦手繪風	1	
20	若松散らし文様	若松	散らし	1	
21	柳に桜文様	柳 桜		2	
22	牡丹に千鳥文様	牡丹 千鳥		1	
23	霞に桜花散らし文様	霞 桜花	散らし	2	
24	乱菊文様	乱菊		2	
25	竹文様	竹		1	
26	杜若文様	杜若	アールヌーボー 風曲線構図	1	
27	瑞穂刈り取り葦手繪風散らし	瑞穂 菅笠「かりほのは らに」	葦手繪風	2	
28	竹文様	竹		1	
29	枝藤文様	枝藤		1	
30	色紙に藤花文様	色紙 藤花		1	
31	枝藤文様	枝藤		1	
32	朝顔文様	朝顔		1	
33	文字散らし文様	「佐野のわたりの雪の夕 暮れ」	3行散らし	1	
34	桔梗文様	桔梗		2	
35	秋草散らし文様	秋草		1	
36	千鳥に帆文様	千鳥 帆		1	
37	崩し松皮菱に蔦文様	松皮菱 蔦		1	
38	吉祥尽くし文様	「壽」 宝珠 枝菊 桐		1	

	文様名称	取材	構図	分量	その他
39	楓木瓜薔薇葦手繪風流水文様	楓 木瓜薔薇 流水 「亀田の川のやまと心」	葦手繪風	1	
40	流水に桜文様	流水 桜		1	
41	文字散らしに桜文様	桜「うつりにけりな い まさらに」	散らし	1	
42	文字散らし文様	「浅くとも清き流れ乃可 きつばた」	散らし	1	

III 半襟模様と名付けられた色刷り図案→4種

1	半襟模様 桜草			
2	半襟図案 刺繍模様「水仙に千両」	欄外に「説明講義中にあり」と注記する		
3	半襟図案 刺繍模様「れんげ草の葉」			
4	半襟刺繍模様及び押画下絵「藤花」			

(2) ハンカチ図案写し →2種

	文様名称	取材	構図	その他
1	色紙取折枝桜花文様	折枝桜花		2枚
2	色紙取折枝楓文様	折枝楓		1枚

(3) その他の刺繍模様や各種図案の絵刷り
→53種

用途は不明であるが、半紙大の和紙に多彩な図がカーボン紙で写してある。他にプリントしたものや鉛筆で輪郭線をなぞったものもある。また引き写しのときの（画鋏のような）ピンで留めた跡がほとんどの絵摺りにあり、それも一か所のみならず複数箇所（両端や四隅）にある場合がある。この差は、数か所のピン跡のある場合には鉛筆や鉄筆（？）で図をなぞった跡が必ずあるため、これらの絵刷りは生地に図柄を写す必要があり数か所を留めたと思われる。一方、単に図案を絵刷りとして引き写すためには

ピン跡一か所であったと判断した。ピン跡が数か所ある場合を、図案が実際に使われたものとして使用痕「有」としている。

以下では図柄のモチーフ（取材）を中心に一覧する。図案数は57、8枚であり、そのうち全く同じか、同じ引き写しに後で線を少々加えたものなどが4種含まれる。またシリーズの図案が元々4枚組であったもののうち3枚が残る場合が含まれる。従って図案数は、シリーズものを一種とすれば、51、2種となる。

特徴の欄には、用紙の種類や引き写しの手法や添削の有無など、読み取れる事は全て記録している。

	図案名称	取材	数量	大きさ	図案用紙	デザイン特徴	その他
1	花籠	籠 白蓮 菊2種	1	4つ切り	和紙薄よう	各部の色相を指示	「馬神」の銘、切り花が籠に盛られている
2	花組み合わせ3種	菊に水 酢漿草に扇面と瓢箪 折枝花紋	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
3	州浜型に枝梅と笹	州浜型 枝梅 笹	2	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し

	図案名称	取材	数量	大きさ	図案用紙	デザイン特徴	その他
4	面	女面	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
5	椿	椿2輪	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
6	竹に蔓朝顔	竹 蔓朝顔	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
7	柳に白鷺	柳の木 白鷺	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
8	椿に鳩	枝椿 鳩	2	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
9	小菊折枝	小菊折枝	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
10	柳に鯉	柳の木 鯉2匹	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
11	水仙	水仙の地生え	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
12	松竹梅	松樹 梅樹 笹 岩	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
13	蘭	岩 君子蘭	2	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
14	牛飼い童子	牛、童子背上で笛吹く	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
15	牡丹折枝	牡丹折枝	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
16	山茶花と梅折枝	山茶花折枝 梅折枝	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
17	櫻折枝	櫻折枝	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
18	小菊折枝	小菊折枝コード9の鏡面の図案	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
19	藤の花	藤折枝	2	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
20	枇杷の実	枇杷の実折枝	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
21	松に鶴	鶴3羽 松樹	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
22	千成瓢箪 椿花	千成瓢箪 椿花	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
14	牛飼い童子	牛、童子背上で笛吹くコード20の鏡面図	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し 粗い筆致
24	朝顔	朝顔	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し 表裏に別々に写している
25	縦州浜形に葡萄	州浜形 葡萄実	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
26	州浜型に朝顔	州浜形 朝顔	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
27	州浜形に舞鶴	州浜形 舞鶴	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
28	州浜形に加賀千代句	州浜形 朝顔 文字散らし「つるべとられてもらいみず」	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
29	州浜形に菊と鳩	州浜形 菊折枝 鳩	1	半紙	和紙薄よう	やや光琳調	カーボン紙写し
30	鬼百合	鬼百合	1	半紙	和紙薄よう	写生画風	
31	菊	菊	1	半紙	和紙薄よう	写生画風	
32	栗	栗折枝	1	半紙	和紙薄よう	俳画風墨絵	山口の銘 「甲」朱入り
33	兔	兔	1			俳画風墨絵	山口の銘 「甲」朱入り
34	馨に桐紋	馨 桐紋	1	農商工部 野紙	和紙野紙		カーボン紙写し
35	馨に葛紋	馨 葛紋	1	農商工部 野紙	和紙野紙		カーボン紙写し

	図案名称	取材	数量	大きさ	図案用紙	デザイン特徴	その他
36	州浜形に藤の花	州浜形 藤の花	1	半紙	和紙薄よう		カーボン紙写し
37	馨に菫	馨 菫唐草風	1	農商工部 罫紙	和紙罫紙		カーボン紙写し
38	雄鶏図	雄鶏 2羽	1	4つ切り	和紙薄よう	彩色写生画風	1年級丁組 藤 岡杉高と署名
39	花卉模写図	椿 桃 橘 梅など 8種	1	半紙	和紙薄様		模写図
40	子犬など模写図	子犬など5種	1	半紙	和紙薄様		模写図
41	青海波に千鳥など 模写図	青海波に千鳥、岩、 雲など	1	半紙	和紙薄様		模写図
42	花器に梅花折枝	花器 2種 梅花折枝	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し
43	模写図	花 4種 唐代婦人像 4種	1	半紙	和紙薄様		模写図
44	模写図	花 4種 唐代婦人像 4種	1	半紙	和紙薄様		模写図
45	模写図	花 4種 唐代婦人像 4種	1	半紙	和紙薄様		模写図
46	模写図	花 4種 唐代婦人像 4種	1	半紙	和紙薄様		模写図
47	布袋図	布袋	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し
48	州浜形に鴛鴦	州浜形 鴛鴦	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し
49	州浜形に鯉	州浜形 登り鯉	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し
50	柳と鯉	柳樹 鯉 2匹	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し
51	亀	岩 亀	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し
52	大黒図	大黒	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し
53	恵比寿図	恵比寿	1	半紙	和紙薄様		カーボン紙写し

(4) 造花部品

造花部品は、羽二重や和紙などを、花びらや萼、葉など、実物大で一枚ずつ個別にかたどって切り抜いたものである。桜やバラ、笹の葉、海棠などの形象を、実際の姿を便化してパターン化している。

造花制作のための打ち抜き型は、必ずしも型紙や図案とは言えない。しかし、パターン化した花びらや葉を、打ち抜いて型取りをしているところは、自然の形を便化して捉える図案的な発想に共通している。ツルの造花制作に関する標本には、打ち抜き型に切られた新聞紙や雑誌記事の掲載された用紙と、実際に打ち抜いた花びらやガク（萼）、制作途中の花の蕾や色付けした葉、さらにそれらを一房の花にまとめた

もの、紙縫りを応用した蕊^{しべ}などが含まれる。打抜かれた新聞紙もまた、文字通り打抜かれているため、そのための金属製の打抜き型が使われたと思われるが、それにあたる道具は発見されていない。

造花部品は、種類ごとに手製の袋や包に入れて仕分けられている。この手製の袋や包紙は、和紙製の罫線紙を糊付けしたものであり、江戸時代の代官所関係の文書の写しや名所図絵中の寺院の鐘楼の説明等に関するもの、秋葉神社に関する内容など日常的とは言えない内容が毛筆で達筆に書かれており、一種のお手本や往来物の写しのような内容を連想させる。そういう意味での紙背文書としても注目できそうである。但し、ツルの事績や背景と明らかに関連する「書

き損じの履歴書」以外のものについては、どのような経緯で用箋とされたのか、この限りでは不明であり、本稿とは別に、これらの用箋に的を絞って検討を進める必然性があると思われる。さらに紙背には、「シンガー衛生帯」の広告（3点）や、やや厚手の「American Home Monthly」の外来の楽譜の印刷物、さらに各造花部品全部をまとめて入れてある最も大きい厚手和紙の袋は、農商務省所管鉾山事務局から出された、ツルの夫・山口昂宛の京城・朝鮮総督府勤務の任命書（光武年間）であり、端をミシン縫いで袋にして使っている等々。身の回りにあった用紙類を大小、仕様の格の上下を分かつずに保管し、手あたり次第利用したものとも考えられる。その使い分けの仕方も興味を引くが・・・また当時、こうした使用済みの用箋が、古紙回収業者を経て流通していた（国立歴史民俗博物館名誉教授・朝岡康二氏談）そうであるから、その点

も視野に入れて検討する余地があるだろう。

話を元に戻すと、紙背文書に含まれた書き損じの途中までの「履歴書（下書）」によれば、造花制作についても東京シンガーミシン裁縫女学院の寮に住みながら修得した技芸であった。造花は、ツルが生涯を通じて親しんだという、ご家族からの伝承が語られる技芸である。包装に使われた新聞やチラシには、明治四十二年から四十三年にかけての出版物が多く、作成当初のものと思われる。打ち抜きの造花部品は、その後の人生を通じて使いきれなかったとも思われるものでもあるが、数量の多さから考えると、あるいは当時、花びらや葉を打ち抜いて作成したまま、仕舞い込まれていたものもあるとも思われる。勿論、残された打ち抜きは、その後の人生の中で用いられることのなかったものである。造花に関しては稿を改めて取り上げたい。

<造花部品の内容一覧>

	造花部品名称	取材	数量	大きさmm	打抜き型材料	その他
1	桜の花	桜花びら打ち抜き花房	多数	18×11	羽二重糊付け	和紙罫線紙の手作り袋に入れる表書きの名称
2	櫻のがく	桜がく	多数	25×6	和紙薄よう	紙縫で作成
3	さくらの葉打ぬき	桜の葉 大小	多数	52×26 31×20	羽二重糊付け 新聞紙裏打ち	和紙罫線紙の手作り袋に入れる表書きの名称
4	ばら花托	花托大小 形態も種々	多数		布糊付け	東京朝日新聞明治四十三年二月十五日（火曜日）第八千四百四十二號の新聞紙で包む
5	はらの葉	バラの葉大小4種	多数	70×39 56×30 35×19 20×17	布糊付け 新聞紙裏打ち	和紙罫線紙の手作り袋に入れる表書きの名称
6	き久打ぬき	菊の花房大小	多数	30×25 30×28	布糊付け 新聞紙裏打ち	和紙罫線紙の手作り袋に入れる表書きの名称
7	打ぬき きくのがく	「中」としてまとめた萼 萼打ち抜き 桜色の花びら	多数	15×15 20×20	羽二重糊付 新聞紙裏打ち	「中」と表書き、小があり、他に大もあったと思われる
8	桜花びら	桜花びら打ち抜き	2包	18×1112	羽二重	表書きなし
9	海棠	海棠花房	77	直径 7 9 11 13・・・	羽二重	和紙罫線しの手作りの袋に入れてある
10	撫子の葉	撫子の葉1枚ずつ	多数	52×8・・・	紙	新聞？明治四十三年四月五日発行第百九十八號で包んである。他に朝顔がくと雪の下と書いた包

	造花部品名称	取材	数量	大きさmm	打抜き型材料	その他
11	すみれの花とがく	すみれの花とがく	各1包		羽二重	和紙罫線紙の手造りの袋に入れてあるさらに和紙にてそれぞれ包む
12	打抜き型いろいろ	葉型4種 菊花型 大中小4種 小花 2種	多数		和紙 羽二重	和紙罫線紙の手造りの袋に入れてあるさらに和紙にてそれぞれ包む
13	赤小ばら	小ばら花びら大小 1枚づつ	多数	22×18 19×15	羽二重糊付け	和紙半紙に赤小はらと表書き
14	久ま笹	熊笹の葉1枚づつ	多数	45×13	布 糊付け	和紙半紙に久ま笹と表書き
15	秋海棠は	秋海棠葉大中小極 小	大1 中2 小5 極小5	159×108 194×83 76×44 41×28	布	シンガー衛生帯広告紙で包み「秋海棠は」と表書き
16	秋海棠	秋海棠花びら1枚 づつ	多数	20×15 15×11	布	和紙半紙に「秋海棠」と表書き
17	雪の下葉	雪の下葉大中小極 小	多数	82×68 62×60 30×30 15×15	布	シンガー衛生帯の広告紙で包んで「雪の下葉」と表書き
18	松葉牡丹	松葉牡丹花びら一 つづつ	多数	23×17	布	和紙半紙に「松葉牡丹」と表書き
19	良ん花	蘭花びら大中小1 つづつ	多数	45×13 41×12 35×10	布	和紙半紙に「良ん花」と表書き
20	ふよ宇	芙蓉花びらと葉大 中小1つづつ	多数		布	シンガー衛生帯の広告紙で包んで「ふよ宇」と表書き
21	朝顔	朝顔花びら・がくと 葉大中小	多数		布	シンガー衛生帯広告紙で包んで「朝顔」と表書き
22	もみじ	もみじ葉大中小	多数		布	American Homw Monthlyの楽譜に包み、「もみじ」と上書

3. 図案から見た文様の概要

以上のように、(1) 半襟の模様図案と型紙 (I・II・III)、(2) ハンカチ模様、(3) その他の刺繍模様、(4) 造花部品等の、主に型紙や絵刷りの図案に見る文様名称・取材に注目して一覧すると、伝統的なものが大半を占めている。新規の西洋風と思われるのは4件のみである。半衿型紙(1) - II、(4)には伝統的な文様のなかに新規の西洋風の文様として“バラ”のみが4件含まれる。4件のうち3件は、造花部品の花びらや花托、葉の打抜きであり、残りの1件は半襟図案の絵刷りである。限られ

た資料数の中での件数であるが、総計146件の図案の中で4件という数は、どのように見ることが可能だろうか。しかも造花部品の3件は、花びら・花托・葉の3件であり、3件で花房1つを構成するとも見えるため、半襟と造花に各1件ずつの“バラ”を確認できるのみとも云える。“バラ”は、当館所蔵品では大正期～昭和初期の和服類や服飾小物に多く取り入れられた典型的な取材である。それと比較して、ここで取り上げた明治40年前後の図案・型紙では、対象資料144件中わずか2件であり、受容の兆しはあるものの、極めて少ないといえ珍しいものだ。

文様の取材（モチーフ）に西洋花を取り入れようとし始めたと言えようか。

構図上の絡ませたような線の描写は、明らかに流水を表すものもあるが、菊花の枝や杜若の婉曲した表現や撫子に尾花を絡ませたもの等、<鞭打つような線>を示唆するアールヌーボー風と捉えられるものが少なくとも4件ある（図1）。但し草花や花卉を、長方形の半襟画面に配置する構図は、日本風としても類似のもの（図2）があり、その境界が曖昧であり、さらに視野を広げて傍証する必要がある。しかし構図におけるアールヌーボー風曲線の表現は、西洋風モチーフとしての“バラ”そのものを取り入れるのに比べれば、与しやすかったのではなかろうか。但しこの点については、さらに検討する必要がある。



図1 尾花に撫子



図2 杜若

なお高島與市郎は半襟など服飾小物を扱った業界の人物であるが、明治40年、12歳から京都市中京区の半襟問屋細田善兵衛商店に務め、その後生涯にわたって、半襟に関わり続け、半襟に関する定本^{ix}といえるものを上梓し、半襟のコレクション^{ix}を残した。この高島コレクションの方には、大正・昭和戦前期の半襟にバラのモチーフが使われたものが数点認められる。し

かし明治期のコレクションには含まれていない。管見によるものであるが、参考になるかもしれない。

今回取り上げた半襟の渋紙型紙と絵刷りの大部分は、伝統的な取材と構図による文様である。その概要を触れておきたい。取材（モチーフ）は、以下のとおりである。

植物：竹 笹 百合 菊（枝菊 野菊 乱菊） 枝花 花びら 杜若 茶花 万両 橘 柳 松（枝松 若松 松皮菱） 桔梗 秋草 唐花 撫子 葵 尾花 花丸 酢漿草 山茶花 バラ 瓢箪 木瓜 桜 楓 牡丹 瑞穂 藤 朝顔 蔦 桐 桜草 水仙 れんげ草 千両 白蓮 瓢箪 梅 椿 蘭 枇杷 葡萄 栗 桃 菫 秋海棠 雪の下 松葉牡丹 芙蓉

気象：雲 霞 流水 波 時雨 青海波 観世水

風景：遠山 人家 川岸 網干 蜘蛛の巣 岩 竜田川 帆 州浜

動物：千鳥 蝶 鳳凰 白鷺 鶴 鳩 鯉 亀 人物（牛飼い童子 唐美人 布袋 恵比寿 大黒） 兎 雄鶏 犬

器物：蛇箪 桧扇 片輪車 笈 菅笠 色紙 宝珠 花籠 扇面 面 馨 花器

文字：俳句 君が代 和歌

文様は多彩で、植物文様に注目しても、松竹梅、橘、桐等の吉祥のアレゴリーや、四君子に由来する菊や蘭のような中国文化に由来し日本文化に溶け込んだもの他、秋草やれんげ・菫のような草花など、身近で親しみのある取材が含まれ、着物の文様とほぼ共通である。高島與市郎は、半襟デザインが服飾業界における先端的な役目を担ったことにふれており、着物の意匠との関連を見る上で興味深い。高島自身のコレクション^xにも、半襟のはなやかな展開が示唆されている。当コレクションの半襟図案に見る取材の展開は、高島の言及がほぼ現実的であることを示唆するものといえよう^{xi}。但し山口ツルコレクションには、半襟の現物は含まれない。

そのため、これらの型紙や絵刷りの図案のモチーフがミシン刺繍にも応用されたことを指摘するに留めたい。今後は、半襟の現物に視野を拡大して、具体的に比較検討することで、文様をめぐる媒体間での類似性や模倣性を確認することが要請されよう。また模写図等は、図案作成の上で絵を描く素養が求められたことを伺わせるものであり、その点に関する当時の評論も知られるが、詳細については次の機会に譲りたい。

4. 東京シンガーミシン裁縫女学院におけるミシン刺繍

コレクションの図案類を収納する手作りの紙袋の紙背^{xii}から、これらの図案類が、ツルが在籍した東京シンガーミシン裁縫女学院におけるミシン刺繍の課程で学ばれたものであることが推察できる。同学院の創設者で校長の秦利舞子による『みしん刺繍ひとりまなび』^{xiii}には、図案の活用の仕方や入手の仕方が明記されている。同書は、出版社・日本実業商会によって、巻末に載せられた広告によると、「この書はみしん裁縫を学ぶ人も之を教ふる人も必ず参考として備ふべきものにして教師欠乏の場所には本書の効用殊に大なり」とする教科書であった。さらに図案に関して詳細を述べている下記2冊の本が、この教科書と同時に出版されたようで、同時に広告として掲載されている。

図案に関する『秦利舞子女史考案 ミシン刺繍繪手本』^{xiv}は、「之はみしん刺繍に適せしむる為に特に立案せしものにして草花、鳥獸、蟲魚、風景、人物等をあつめたるものなり」とある。さらに『秦利舞子女史編 みしん刺繍用繪手本手引』が、同様に別冊^{xv}になっており、「之はミシン刺繍繪手本にて刺繍を学ぶ人の為縫方の順序及糸色番號を示したれば初學者には最も有益なるものなり」と解説し、刺繍技法を中心に編集されている。

前者の繪手本に関しては、「一番より五十番迄五十種五十枚全部○脱た、う入 但し一枚づゝにても販賣す」と添え書きされており、シ

ンガーミシン刺繍用として、図案50種50枚の存在が確認できる。但し、刺繍繪手本の方は、国会図書館所蔵本の場合、表紙と目次のみであり、コレクションの図案類とほぼ共通のモチーフ名称は判明するが、図案の現物は紛失かと思われ、含まれない。そのため文様のイメージに関しては、不明である。さらに資料の渉獵とともに検討を進める必要がある。

なお当館には、同学院で学んで制作したとされるミシン刺繍作品「鶏」が遺族から寄贈されており、それによると、秦利舞子による指導内容に照らしても、今日のミシン刺繍とは全く異なり、手刺繍に近い技法がミシンによって再現されたことが確かめられる。詳細については、池田の報告^{xvi}が参照できる。比較による検討は今後の課題である。

また山口ツルコレクションに含まれる、半襟模様と名付けられた色刷り図案の2〈半襟図案 刺繍模様「水仙に千両」〉



図3 兎図

の欄外に、「説明講義中にあり」という注記が印刷されていることで、教育教材であることも判明する。またツルが作成した絵図（図3）も教育標本として残されており、図案教育もされていたことが示唆された。

さらに、大正期～昭和戦前期における背景としての半襟業界と半襟需要の隆盛について、高島與市郎も著書の中で触れており、ミシン刺繍の半襟との関係性を探る拠り所になると予想されるが、本稿では立ち入ることはできなかった。また「婦人画報」「主婦の友」などの当時出版された女性誌には、学院の記事・広告とともにミシン刺繍に関する記事や、口絵に作品が掲載されているものもあり、ここでもミシン刺繍の図案をめぐる多様な関係性が予測できるが、現段階では力が及ばず示唆するに留めたい。

以上、ミシン刺繍等の図案をめぐる状況について追及する余地を残しているが、本稿は、

現状での調査報告として、多くの課題を提起させていただくことを以て、お許しいただきたい。

ⁱ 横川公子・山本裕香・佐伯順子「シンガーミシン洋裁講習会の衣服雛形について—山口津留氏制作の寄贈雛形—」、『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)』43巻、1996、pp.121-128。

横川公子「シンガーミシン裁縫女学院の雛形」、『関西文化叢書7 東アジアにおける洋装化と洋裁文化の形成』、武庫川学院 武庫川女子大学関西文化研究センター、2008.3、pp.160-162。

ⁱⁱ 横川公子「明治期における一女性の技芸修業—故山口ツル氏の遺品、袋物標本とその型紙を通して—」、『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)』第57号、2002.12、pp.135-145

ⁱⁱⁱ 横川公子「山口ツル袋物関連コレクションについて—一名称を中心に—」、『武庫川女子大学資料館紀要』12号、2018.12、pp.37-47。

池田仁美「研究ノート シンガーミシン裁縫女学院におけるミシン刺繍教育」、『武庫川女子大学附属総合ミュージアム紀要・年報』第1号、武庫川女子大学附属総合ミュージアム、2021.3、p.39。

^{iv} 解説・解題(山辺知行,上野佐江子)『小袖雛形本集成』帙入り全4巻、学習研究社、1974。

^v 「西鶴町人物三部作」(日本永代蔵・世間胸算用・西鶴織留)の登場人物と挿絵、服飾用語の調査等を拠り所とした研究を実施した。

^{vi} 紙背文書の山口ツル履歴書下書には、「結婚のため共立女子職業学校を中退」したことが記されている。遺族によると、津留(ツル)は山口家の跡取りとして家督を継ぐ立場にあったということ、早くから手に職をつけるための修行を目指していたという。但し、共立女子職業学校には、麻布の自宅屋敷から、馬車による送迎を受けて通学したと伝えられている。山口家は福岡の出自であり、ツルの父親は福沢諭吉による「慶應義塾」の立上げに協力した一人であるという。

^{vii} 山口ツルコレクションの袋物標本は、約200種のぼる型紙の他に、柄入木綿製の実物大のものが含まれている。寄贈者である家族の談によれば、一部は、生前のツルが使用していたという。

^{viii} 高島與市郎：1964『和装小物の史実』和装小物の史実出版委員会、真陽社刊。

^{ix} 高島與市郎による半襟コレクションは、『半襟の美〈高島コレクション〉』(フジアート出版、1984)として出版され、その現物のコレクションは、後継の(株)秀粋の市田奈美子氏から武庫川女子大学附属総合ミュージアムに寄贈されている。

^x 高島與市郎による半襟コレクションは、『半襟の美〈高島コレクション〉』(フジアート出版、1984)で参照できる。

^{xi} 高島與市郎『半襟の美〈高島コレクション〉』(フ

ジアート出版、1984)に掲載する半襟の図案については、先行研究(倉盛三知代「大正時代の半襟について」『和歌山大学教育学部紀要—人文科学—(第1分冊)』第41集、1992)によって、その周辺の情報も含み、モチーフ等が一覧されているため、本稿でも参考にさせていただいた。今後さらに実物資料の検討を進める上で必見の取組みの一つである。

^{xii} コード4造花打抜部品包：東京朝日新聞 明治四十三年二月十五日(火曜日)第八千四百四十二号

コード10朝顔がくと雪の下打抜部品包：新聞？ 明治四十三年四月五日発行 第百九十八号

^{xiii} 秦利舞子：『みしん刺繍獨り学び』日本実業商会、1912。

^{xiv} 秦利舞子：『秦利舞子女史考案 ミシン刺繍繪手本』日本実業商会、1912？。

^{xv} 秦利舞子：『秦利舞子女史編 みしん刺繍繪手本手引』日本実業商会、1912？。

^{xvi} 池田仁美：「研究ノート シンガーミシン裁縫女学院におけるミシン刺繍教育」、『武庫川女子大学附属総合ミュージアム紀要・年報』第1号、武庫川女子大学附属総合ミュージアム、2021.3、p.39。